

令和6年度 第2回愛知県特別支援教育連携協議会 議事録

日 時 令和7年1月24日（金）

午後2時から午後3時半まで

会 場 自治センター 12階 会議室E

1 開会

2 教育部長挨拶

委員の皆様には、ご多用の中御出席いただき、また、日頃は本県の特別支援教育の推進にご尽力いただいていることにお礼を申し上げる。

社会の流れが速い中、子供たちのニーズに合った学校づくりを進めていかなければならない。愛知県教育委員会では、中高一貫校を開校させたり、高等学校では全日制、昼間定時制、通信制を同じ学校内に設置して、それぞれのニーズに合った授業ができるように、学び方の多様化に対応できる学校を作ったり、中学校時代にうまく卒業ができなかったとか、学び直しをしたいとか、外国にルーツのある子たちの学びの場として夜間中学を設置したりという取組を進めている。

本日は、中高一貫校第一次導入校の合格発表の日である。例えば、明和高校は、1.7倍という高い倍率であった。社会の動きに合わせて、学校の中の動きやあり方も変えていく必要がある中、特別支援教育においては、本年度から「第3期愛知県特別支援教育推進計画」に基づき、障害の有無によって分け隔てられないことがない共生社会の実現に向けた特別支援教育の一層の充実をめざして取り組んでいる。取組を推進するためには、教育、福祉、医療、保健、労働等の分野を超えた関係機関の一体的な連携が不可欠である。近年、特別な支援を必要とする子供が増加する中で、多様なニーズに応えて、乳幼児期から学校卒業後まで生涯にわたって一貫した支援の充実が必要である。県内各地域における関係機関の連携を支援するこの会議は、大変重要な役割を担っているものと考ええる。

本日は、委員の皆様から、忌憚のない御意見をいただきたい。

3 会長挨拶

引き続き、会長としてよろしくお願い申し上げます。特に協議では、前回ゆたか福祉会ワークセンターフレンズ星崎の山崎所長様より障害者福祉施設の状況について貴重な資料やお話をいただいたが、議論する時間が限られていた。今回引き続きその資料をもとに、障害のある子供たちの卒業後の自立と社会参加に向けた取組について議論を深めていきたいと計画している。本日の研究協議が本県の特別支援教育の発展に資することを祈念して、挨拶とさせていただきます。

4 副会長挨拶

昨年10月31日、11月1日に愛知県総合教育センターにおいて全国特別支援教育センター協議会研究協議会愛知県大会が行われた。お力添えをいただいた特別支援教育総合研究所の先生方を含め、100名以上の方が本センターに来所いただいた。研究主

題は、「共生社会の実現に向けたインクルーシブ教育システム構築のさらなる推進」、副題は、「つながりを大切にしたい特別支援教育を目指して」である。参加いただいた先生方からのアンケートの中には、「教育だけではなく、他機関とのつながりが一つのキーワードだと思いました。」「特別支援教育を受けている子供たちが、生き生きと将来に向けて学ぶためには、まずは、支援者がつながることが大事だった。」という声をいただき、つながること、連携することの大切さを改めて感じている。

また、センターで行っているeラーニングの講師の先生が、「点と点そして顔と顔をつないで、線にしませんか。線と線が繋がれば面になります。そうすれば、大事な子供たちは、落っこちませんよ。」と言われた。本日も大切な子供たちのため、連携した支援について協議を深められればと思っている。

5 議事

〔報告事項〕

(1) 令和6年度愛知県特別支援教育体制推進事業の実施状況について

(2) 令和6年度発達障害等関連事業内容について

—資料2～4により説明—

〔協議事項〕

愛知県の特別支援教育の推進のために、関係機関が連携し、特別な支援の必要な子供に対して生涯にわたって一貫した支援を行うための取組について

—事務局から協議のポイントの説明—

会長 まず、はじめに、卒業後の自立と主体的な社会参画に関して、山崎所長様から前回提案いただいた資料を御覧になった御感想や課題等、お出しただけたらと思う。

委員 特別支援学級の担任をしたときのことを思い出した。そのとき勤めていた自治体では、特別支援教育に関する研修がいろいろな方の協力のもと年間10回ほど行われていた。その中には実際に事業所を見学する機会も設けられていた。我々教員は、自立支援の事業所にはどういったものがあるのかということあまり知らない。目の前のことが精いっぱい、学校を卒業した後どんな生活をしているのかということにもなかなか視点がいかないところがある。支援に関わる方や関係機関の方々からも、先生方に実際に事業所を見ていただきたいという要望が強くあった。実際に事業所の様子を拝見し、とても参考になった。子供たちが社会に出てどのように自立していくことができるかが重要であり、そのために学校で何ができるか、どういったところとつながっていくことが必要かということ、そのときに初めて意識したことを思い出した。特別支援教育の推進にあたり、卒業後、この子がどのように生きていくのか、どことつながっていくとよいのかという視点をもっていかなくてはならないと改めて感じた。

会長 義務教育の段階で、卒業後の姿が見えにくいのが、子供たちが将来地域に出てどのように過ごしていくのかをしっかりと見て、日々の実践に生かすことが重要で

あるとの貴重な御意見をいただいた。保護者の立場からはいかがか。

委員 特別支援学校の先生方は、就労を意識して、支援の内容を減らしたり、ある程度本人に任せてできることを増やしたりという取組をされている。子供に応じて、また成長に応じて、必要な支援は変わってくる中で、必要な支援内容を探る時期と支援によって成長している時期と、必要のないものはできるだけ減らしていく時期があると思うが、就労を間近にした時期に、調子を崩してしまうというケースがしばしば見られる。思春期も近く、精神の状態が波打ってしまうということもあると思う。生涯にわたり一貫した支援、切れ目のない支援という意味でも、その点を注意していただけるとよい。指導する先生と気持ちをサポートする先生がいる環境を作り出せるとよいのではないか。

委員 特別支援学校に通う子供の実態はさまざまである。一般就労や就労継続支援A型で働ける子もいれば難しい子もいる。一人一人に合った教育をする必要がある。その子が5年後、10年後に果たしてその事業所で就労しているだろうかと考えてもらえるとよい。そのために、先生方には、資料にあるような事業所に出向いて勉強してもらいたいと思う。また、先程、短時間労働も取り入れていくという話があったが、我々の立場からすると、労働のない時間はどうするのかという点も考えていただけるとよい。

会長 地域の事業所と学校の先生が様々な社会資源を知って、自立生活につなげるという取組が行われているが、まだ不十分ではないかという御指摘かと思う。

委員 学校にいるときに、社会に出る姿が想像できないという話があった。3、4年前のものだが、豊橋市にあるチョコレート会社のドキュメント映画がある。私は、それを第1回の会議の後に知り、見させていただいた。チョコレートのすべてを作れなくても、一つ一つの工程をプロのように頑張れば、プロのショコラティエの方に肩を並べるくらいの力をもてる、失敗しても何度もやり直せばよいという内容の映画で、わかりやすい映画であった。上映会のようなことをして、見る機会を増やすとよいのではないか。そうした取組を行うと、学校側と就労事業所側の点と点を結ぶ手助けとなるのではないかと思う。

会長 貴重な提案である。様々な障害の特性に応じて、様々な工夫をされている事業所で働き、活躍されている方はたくさんいる。映画などを通して理解啓発を進めることができればよいと感じた。

ここで、公教育とは違った視点で子供たちの支援を行っている中学校の取組を紹介していただけたらと思う。

委員 (以下紹介の概要)

- ・不登校特例校としてスタートし、現在は学びの多様化学校と呼ばれている。本年度よりフリースクールも開校。
- ・学校のスタッフの中には、将来公認心理士を目指している大学院生であるサポートスタッフもいる。年齢的に距離も近く、ロールモデルになることもある。学生にとってもよい機会となっている。
- ・人として、お互いが足りないところは補い合っていこうというところを強く伝えている。共生社会の実現が最終的な目指すところであるが、そもそも排除しないことを目標としている。授業スタイルについては、一人一人をえこひいきという考え方で行っている。

- ・授業スタイルの一つとして、参加が難しいと感じる授業は別室で行うステップアップルームを設置している。ステップアップルームや自宅でオンライン授業が受けられる。水曜日午後は、選択授業を行っている。興味関心に応じた授業であるが、関わり合いをベースにして将来どんな方向に行きたいのか、自分は何が得意で何が苦手かを見極めるための授業でもある。
- ・教員研修は、大学教授によるものや支援教育カウンセラーによるものもある。カウンセラーから WISC の解説やどう教育活動の中に生かしていくかも学んでいる。
- ・進路指導に関しては、広く選択できるようにしている。就労移行支援事業所や専攻科のブース等も作って、説明いただくようにしている。いろいろな選択肢があることや友人が様々な選択をして頑張っていることを知ることが、一步を踏み出すことにつながると考えている。
- ・高等学校専攻科で行っている授業は、情報系の学習の他、校内営繕、学校のイベントスタッフ、電話をとる、宿泊研修に一緒に行き、お兄さんお姉さんの役割などがある。誰かのために役割をもつことは、どんな仕事であっても必要である。生産性がなくても、社会に必要とされていると思えることがよいと思っている。
- ・親御さんのパワーを大事にし、助けてもらっている。都道府県によって、福祉サービスなども違いがあり、そうしたことも全国の親の会で情報交換している。

会長 日本では、公教育がメインになっているが、世界にはフリースクールとオルタナティブスクールという大きく2つの形態もある。フリースクールは不登校の子供の学校で、オルタナティブスクールは子供の個性や興味に応じた学校で、ヨーロッパやアメリカでは全体の3割がそうした学校となっている。これから、日本でも増えていくと思われる。注目すべき取組の紹介をいただいた。フリースクールは、県内には、他にあるのか。

委員 現在手持ちのデータがないが、愛知県にもフリースクール協議会というものあり、そこに私共も所属している。

委員 県内で委託事業としては、5つ。それ以外に市の事業という形で校内にフリースクールを作っているところも増えている。

委員 名古屋市は新しい学校づくり推進部が所管している。正確なことをこの場でお答えできないが、設置はされている。

会長 このような学校や通信制の学校が増えており、その中に精神疾患、発達障害をもつ生徒が非常に増えていることも話題になっている。これらの学校の先生方の特別支援教育に関する専門性について、光が当たっていないようにも感じている。

話は少し変わるが、資料にもあるように、小中学校の特別支援学級を卒業して、特別支援学校の高等部に入学するケースが非常に多い。高等部では、就労に向けた様々な取組が行われている。先程委員より、高等部の就労に向けての話もあったが、特別支援学校における卒業後に向けた取組について紹介いただきたい。

委員 基本的に特別支援学校では、個々の障害に合わせた教育を行っている。生徒が不安に思わないような丁寧な説明が必要であると感じている。今日の資料2-2の(4)にも、小中学校の先生方がなかなか高等部卒業後の姿が見えないという御指摘がある。また、知的特別支援学校高等部で実際にどのような学びが中心に

行われているかについて、御理解いただいている先生方もいるが、子供の実態や担任の先生の経験によっては、情報不足だったと思われる経験もしている。入学後に、こんな学習をしていると思わなかったという誤解が生まれることがある。小中学校や高等学校と大きく違うのは、教育課程である。もととなる教科の内容が違うので、それまで特別支援学級に在籍し、教科書で学んできた子供がギャップを感じるようである。特別支援学校側の課題としては、小中学校の対象の子供に対し、知的障害特別支援学校高等部でどのような学習を行っているか、将来的にはどういう進路に進む人が多いかという情報を知ってもらうことである。また、小中学校の先生方は、対象の子供や保護者がそうした情報になるべく早く知ることができるようにすると、進路に関する選択肢が広がると思う。

委員 例えば数学の学習を行うことにどんな意味があるのか、将来どんな役に立つのかという学問の話があったりする。教え込めば、 $15+8$ が一時的にできたりすることもあるが、 23 がどれくらいの大きさなのかと結びつかなければ、覚えたところで仕方がない。例えば、たこ焼きを買うときに、6個入り、8個入り、10個入りがあったとする。自分のおなかがすいているときに、10個入りと言えることは、その子の人生を豊かにする。私としては、学問はその子が積めるところまでは積んであげてほしいと思う。本人の人生が豊かになるし、自立につながる。仕事をしたときに、任せておけるレベルが変わってくる。

気を付けてほしいことは、勉強をするのがつらい、嫌いになると、学校生活の間で人間が嫌いになってしまうことがあるということである。先生に見つけられると怒られるからやめておこうとか、本人が納得していない厳しさを受け続けると、人が嫌いになる。仕事がうまくいかなかったりやめたりするのは、人との軋轢が原因であることが多い。人が嫌いな大人や勉強が嫌いな大人にならないように育てるのが最も必要なことではないか。それを意識すると、自立につながっていくのではないか。

キャリア教育についてであるが、大人になるとほっておかれる時間が増える。自分の好きなことや時間のつぶし方をもっていることが大事になってくる。自立活動については、本人に必要な環境のサポートが何かを見極めていくことが必要である。また、就職すると報酬がはっきりする。「お金がもらえるから、仕事をするんだ。」「今日もらったお金でジュースを買うんだ。」という子供もいる。作業学習などの場では、報酬系の楽しみを取り入れていくと、就労につながる一つのサポートになると思う。

インクルーシブに関する話もあった。自分の同世代の同じ町に住む子供の中から、必要な支援が大きかった子が消えてしまわないことが大事なことだと思う。あの子はだれだとならない。「いつもこの時間に、散歩しているよね。」やその子の名前がわかるだけでも、本人にとっても家族にとっても大きい。「○○さん、挨拶を返してくれるようになったね。」などと言われると、本人も家族も支えになる。特別支援学校の子が地域の学校に籍をもっているだけでも違ってくると思う。できる範囲で地域から消えない取組を続けていただきたい。

最後に、映画の話が出たので、私からも一つ紹介しようと思う。「青いライオン」という知的障害のある人が画家（個人事業主）になった話が全国で公開されている。本人のもっている能力を大切にしながら、療育に一生懸命取り組んで社会人

になっていった話である。御覧いただけたらと思う。

委員 特別支援学校高等部には、特別支援学級から多くの子が入学しているが、なじめない子がいることを感じている。その点についても、考えていただけるとよい。

委員 教育委員会の法定雇用率が低い状況が続いている。研修の際に障害者雇用の話をしたところ、現職の先生方から、「障害のある方は学校では働けないのでは。」という意見が出たことがある。教員として働くことは難しい場合が多いかもしれないが、事務職員、用務員など多職種の方が、学校運営に従事することを意識していないことに驚いた。先生方が障害のある方と共に働くという感覚、経験がなかったら、子供たちに小中学校で障害のある友達と共に生活した後、将来社会で共に働いていくということを教えられないのではないか。

中学校の特別支援学級を卒業した後、高等学校に進学するケースが増えている。中学校卒業後の進路について、昼夜間の定時制や通信制の高等学校なども含め、多様な生徒たちがいる状況を、小中学校・高等学校の先生方に理解していただきたい。また、今回の会議では不登校特例校（現在は「学びの多様化学校」）に関する話題提供があった。岐阜県では、市町の先生から声が上がり、私立だけでなく、複数の公立の不登校特例校が設置され、実践が重ねられている。愛知県ではそうした動きは起きないか。校内フリースクールで対応しているということもあるが、いくつかの学校で特例校として支援をしていくという取組があってもよいのではないか。学校は多様化している。他県の動きの情報も収集し参考にしていきたい。

協議についてであるが、卒業後の進路については、一般就労が目標ではないということを理解していけるとよい。最も大事なものは、卒業後の居場所があることである。幼・小・中・高で関わりのあった友達と卒業後もつながっていける、地域の人とのつながりが広がってほしい。学校生活の中で、人とつながる、先生と話すことや、友達と活動することが「楽しい」という経験を積み、生活スキルを高めて、対人関係、社会性を伸ばしていくと、学力もついてくるのではないか。「人から教わりたい」という気持ちから「もっと活動したい」という気持ちが生まれ、言葉や数の理解が進んだり、運動能力などが伸びたりすることにつながる。

また、先程、チョコレート会社の映画のお話があったが、愛知県内に障害者雇用に取り組む会社が多く立ち上がってきている。私たちのような特別支援教育の関係者がこのような会社について理解を深め、積極的に商品を購入して、応援して、企業の付加価値を高めていけるとよい。障害者雇用に力を注ぐ企業の新たな取り組みを「知って終わり」ではなく、私たちが主体的に「行動を起こすこと（＝実際にお店に出かけること）」が大切である。

今日は、通常の学級に在籍する発達障害の子供たちの議論があまりなされなかったが、通常の学級、特別支援学級、特別支援学校の子供をわけて考えるのではなく、それぞれの課題と成果はつながっていると考えたい。それぞれの子供たちがどのような成長をするかについて子供を通して学び、適宜、情報交換していくことができるとよい。そのためには、学校を卒業した障害のある成人が働く現場を見に行くことが大切である。いろいろな関係機関を見て学んでいただけるとよい。

会長 特別支援教育において、新しいことを進めなくてはならない。古い価値観や制

度にとらわれているとなかなか進まないものである。研究者の間では、日本の常識、世界の非常識などと言われていたりする。多様性というのはどういうことかということを今一度考えていただけるとよいと感じる。

皆様からの貴重な意見に感謝する。

6 その他

—事務連絡（事務局）—

- ・ 議事録をWebページに掲載予定であること
- ・ 次回の協議会について

7 課長挨拶

委員の皆様から貴重な御意見を賜り、感謝申し上げます。協議の中で、それぞれのお立場から、また不登校特例校の貴重なお話を伺うことができた。改めて子供たちが周りに認められながら、居心地のよい場所で自己選択、自己実現をすることが大切であると感じた。いただいた御意見を生かしながら、福祉、医療、労働、保健等と一丸となって特別支援教育を進めてまいりたい。

今後も皆様方の御支援、御協力をよろしくお願いしたい。

8 閉会